日本語のオノマトペ述語文

キーワード：オノマトペ，情態副詞，叙述性，有縁性，時間的限定性

1. はじめに

初めに主語・述語論一般と、情態副詞の叙述性について触れた先行研究を見る。

術語編（1996）pp.689-690「述語」曰く、「物（実体）は物として概念化し，これを名詞の形で措定し，その物の行為や状態を述べて判断を文にまとめる【略】その行為や状態を述べる文の要素が述語である」「その物の方は，【略】表現の上に示されたり，示されなかったりするが，その物のあり方の表出は，【略】これを欠いては話にならない」「述語は【略】1 語の場合もあるし，いくつかの語からなる場合もある．しかしその中にあって，述語の中心となるものは，動詞または用言【＝動詞・形容(動)詞 ; p.1370】である.【略】名詞で述語を示す名詞文もある」「判断は，まず，ある実体（物）の存在を措定する存在判断があり，その上に，その物の属性の存在についての賓述判断が加わる二重構造をなす【略】存在は賓辞ではないが，ある物の存在を文の形で述べるとき，【略】存在を示す言葉をあたかも賓辞を表わす語のように述語として述べる」「動詞を限定する副詞や，動詞の補語になる名詞なども，その動詞とともに述語を形成する．この副詞や名詞は，いずれも，動詞だけでは十分に意味内容を伝えられないときに，補足的に，かつ限定的に加えられている」。

森岡（2001）p.197, p.231, p.264, p.276 でも叙述語（＝述語）の終止法（＝文終止）の例として挙げられているのは名詞、動詞、形容詞、情態詞（＝形容動詞）だけだが、叙述性を持つ副詞として pp.288-297 に情態副詞を示している。「花が<u>美しく</u>咲く。地鳴りが<u>不気味に</u>響く。花が<u>ひらひらと</u>散る。砂塵が<u>濛々と</u>立つ。」を比べて、「傍線の修用語は主語を叙述すると同時に叙述語を修飾している。形容詞・情態詞・情態副詞がまず主語の状態を叙述し、その状態を動詞によって具体的に再叙するという構文である。【略】この構文については【略】「補足並立」と名付けておく」と述べ、象徴言系（＝狭義オノマトペ）と漢語系（＝漢字にトが接尾、非オノマトペも含む）と指示

言系（＝「こう・そう・ああ・どう」等）の 3 つを挙げている。装定用法（＝限定用法）に限り叙述性が認められ、「ふらふら。呆然。そう。」のような裸の情態副詞による述定用法（＝叙述用法）には言及が無い。しかし術語編と違うのは、動詞の単なる「補足」から一歩踏み出して述語の「並立」を認めている点である。なお漢語系、指示言系の情態副詞については議論を単純化する為に本稿では扱わない。

主語については、術語編 p.687「主語」曰く、「判断においては，主辞と賓辞は必須の要件であるが，その判断を表わす文についていえば，述語は必ず表明されるけれども，主語は常に示されるとは限らない.【略】日本語のような言語は，主語の標示は常には必要としない.「行く」という表現は，それだけで立派に 1 つの文をなしていて，主語を省略しているわけではない」「一般的にいって，判断の主辞におかれる概念は,【略】概念を概念として表わす品詞，すなわち名詞で示される」。「主語の省略」でない理由については、述語単独で安定して現れるからという説明のようだ。

ところでこの論法は、3 節で扱う「動詞省略」の問題にも適用できる。本稿で言う「裸のオノマトペの述定用法」は動詞等を省略した形であるという前提で田守（1999）は書かれているが、単独で安定して現れる以上は「省略」ではないという理屈になる。また「省略である」という考え方は、「省略」前後の形に意味の違いがあってもそれを捨象する危険性があるが、2 節ではその「意味の違い」が明らかになる。

2. 述語の意味的なタイプを通して品詞を分析する議論をオノマトペに応用する

八亀（2001, 2003, 2007, 2011）曰く、文の意味的なタイプは時間的限定性（＝一時的・偶発的か、恒常的・本質的か）に応じて一時的な〈動き〉〈状態〉〈存在〉と恒常的な〈存在〉〈特性〉〈関係〉〈質〉に分かれ、動詞述語文は〈動き〉〈状態〉〈存在〉〈特性〉〈関係〉を、形容詞述語文は〈状態〉〈存在〉〈特性〉〈関係〉を、名詞述語文は〈動き〉〈状態〉〈存在〉〈特性〉〈関係〉〈質〉を表すという。なお八亀（2007）p.65 では動詞述語文は〈動き〉〈状態〉〈存在〉〈特性〉を表すとされ、〈関係〉は除外され

ているが、八亀（2001）pp.104-105 は「関係動詞」を挙げて p.106 で〈関係〉を表すと述べている為ここでは〈関係〉を含めた。また八亀（2003）p.22 には「名詞述語文は、基本的に《質》を表す。《質》は《特性》の束であり、クラス分けを行う」とあり、名詞化された他の品詞は名詞そのものと見なすという前提があるようだ。

これに対して影山（2011）p.4 曰く、品詞と時間的安定性（≒時間的限定性）との対応について、動詞は「出来事・一時的状態・習慣的動作・属性」を、形容詞類は「一時的状態・属性」を、名詞は「出来事・一時的状態・属性」を表すという。但し、名詞でも「自転，公転」のように「習慣的動作」に当たる語が存在すると考えられるため本稿では名詞にもこれを認める。影山の分類では八亀の言う〈関係〉〈質〉に当たる要素は言及されないが、この点は影山に従う。〈関係〉は一見して「恒常的」に見えるかもしれないが、例えば「似ている。等しい。同じだ。同時。ソックリ。」のような〈関係〉を表す語は、属性主と属性の関係でなく〈質〉と〈質〉の間の〈関係〉を表しており、属性主と属性の関係が一時的か恒常的かを問題にする議論とは別枠になる。そして〈質〉も、八亀（2003）p.22 曰く「《特性》の束」のように見えるかもしれないが、影山（2011）p.4「病人，満腹，白紙」のように一時的〈状態〉を表したり、「移動，散歩，洗顔」のように一時的〈動き〉を表す場合もある。

本稿では一時的〈動き〉〈状態〉〈存在〉と恒常的〈習慣〉〈特性〉〈存在〉とその他の〈関係〉を認め、〈質〉を削除する。〈質〉は「名詞」と同義であり、品詞の分析には役立たない。また、時間的限定性に関する概念から〈関係〉を除外する。時間的限定性に関する概念のうち〈動き／習慣〉と〈状態／特性〉は、同じものを一時的か／恒常的かで呼び分けている。〈存在〉もまた一時的／恒常的〈存在〉に分かれる。

オノマトペ（＝4 節で述べる副詞的オノマトペ）について考える。例えば「ピューピュー。キラキラ。アリアリ。」は順に一時的〈動き〉〈状態〉〈存在〉を表すと内省される。例えば「お星さまキラキラ。」（童謡『七夕さま』）は一時的な光景の描写であって恒星の半永久的な輝きの表現ではない（「いつでも星はキラキラ輝く」でなく

「今夜も星がキラキラ輝く」)。但し装定用法ならば一時的な「北風がピューピュー吹く。ダイヤモンドがキラキラ光る。不快感がアリアリと顔に出る。」のみならず恒常的な「北風はピューピュー吹く。ダイヤモンドはキラキラ光る。不快感はアリアリと顔に出るとは限らない。」も可能である。〈状態〉について見ると、一時的な「ダイヤモンドがキラキラ。星がキラキラ。」は自然だが恒常的な「*ダイヤモンドはキラキラ。*星はキラキラ。」は不自然で、全称命題と述定用法は両立しない。但し「貴金属はピカピカ、ダイヤモンドはキラキラ。」のように対比する場合など、主語でなく主題を前景化する場合には、一時的な含意でも助詞「は」は可能である。術語編 p.688「主語」曰く、「主題と説明の関係は，必ずしも文法的な主語と述語の関係とは一致しない.【略】日本語の助詞ハの主要な用法は，まさしくこの主題を提示するところにある」。ここでは全称命題で解釈する。動詞だと「ダイヤモンドが輝く。／?ダイヤモンドは輝く。」いずれも可能で、「星が輝く。／星は輝く。」だと全称命題の許容度は更に高い（反射体か発光体かの違いであろう)。〈動き〉では「雨が降る。／雨は降る。／雨がザーザー。／*雨はザーザー。」「火が燃える。／火は燃える。／火がボーボー。／*火はボーボー。」となり、〈存在〉では「幽霊が現れる。／幽霊は現れる。／幽霊がアリアリ。／*幽霊はアリアリ。」となる。以上をまとめると下表のようになる。

表 1　述語の意味的なタイプと品詞との対応関係

賓述判断の種類	時間的限定性	一時的			恒常的			ほか
	意味的なタイプ	動き	状態	存在	習慣	特性	存在	関係
属性判断	オノマトペ述語文	○	○	○	×	×	×	○
	動詞述語文	○	○	○	○	○	○	○
	形容(動)詞述語文	×	○	○	×	○	○	○
概念判断	名詞述語文	○	○	○	○	○	○	○

上表で名詞述語文は動詞述語文と区別が付かないが、既述のように名詞述語文とそれ以外との区別は時間的限定性によらない。「星がキラキラ。星が輝く。星が美し

い。星が綺麗だ。」が「星のキラキラ。星の輝き。星の美しさ。星の綺麗さ。」のように名詞化されると、術語編の言葉を使えば、賓述判断が存在判断へと変換され、属性が賓述判断から名詞の側へと吸収される。属性主となったその名詞は、この例だとそのまま述語となっているが、これらに「が素晴らしい／を褒め称える／に感動する」を付ければいずれも主語／補語となるように、文法的に未分化な、あるがままの概念＝カテゴリーを本質としている。概念を判断する、即ち概念化するのが名詞述語文の賓述判断であり、属性を判断する他の述語文との違いはそこにある。

影山（2011）p.4 の主張を反映し、上表で形容詞述語文は〈動き〉〈習慣〉を欠く。時間的限定性にかかわらず、とにかく「動き」を意味することが出来ないのが形容詞述語文の特徴ということになる。恐らく、述定用法に限らず形容詞自体の意味的特徴がそうなっているのではないか。この点については本稿では立ち入らない。

オノマトペ述語文においては恒常的な含意が許容されない。今まさに現前する事態の描写であれ、過去に経験した出来事の回想的な描写であれ、想像される出来事に臨場感を付与した描写であれ、とにかく描写される時点に叙述が縛り付けられている。装定用法では恒常的な含意も許容されるが、それは動詞に修飾しているからであろう。オノマトペの意味的特徴と言えば有縁性である。意味内容が表現形式を動機づけていることを有縁性と言い、類似性・近接性に分かれ、類似性があればその記号は類像、近接性があれば指標、恣意的なら象徴と呼ばれる。表現形式が有限である以上、有縁性によって意味内容も有限となり、恒常的含意が許容されなくなると考える。「地球儀が-／地球が-クルクルクルクルクルクルクルクル。」という文を見ると、地球儀の方は有限回の回転しか含意されえないが、原理上、地球には半無限回の回転の解釈もありえたはずである。しかし筆者はどうしても回転がいずれは終結する、あるいは回転の期間を区切って描写するという含意を汲んでしまう。

以上のように裸のオノマトペの述定用法は独自の意味的制限を有し、例えば「地球が回る。／地球は回る。／地球がクルクル。／*地球はクルクル。」となる。しか

し例えば「地球はクルクルと。」のように、助詞を付けて潜在的に動詞「回る・自転する・公転する」を含意させると途端に恒常的な含意が許容されるようになる。従って「裸のオノマトペ」と言う時には、「と・に」のような助詞や、「する・なる・だ」のような動詞化・形容動詞化語尾を付けてはならないし、動詞等に修飾させてもいけない。「と・に」を付けると修飾語として明示され、それ自身で述語であるという解釈が棄却されると考える。森岡（2001）の言う「補足並立」は、わざわざ叙述性を薄めた修飾語としての情態副詞の叙述性を指摘しており、やや遠回しである。

八亀（2011）や影山（2011）は動詞・形容(動)詞・名詞のあいだに時間的限定性に関するグラデーションを指摘しているが、本稿の議論（表 1 参照）によればそのようなものは存在しない。しかし品詞のあいだの類似性について議論することは可能だ。名詞述語文と他の述語文との論理的な違いについては既に述べた。形容(動)詞述語文は〈動き〉〈習慣〉を表せない点で動詞述語文と異なる。オノマトペ述語文は恒常的含意が許容されない点で動詞述語文と異なる。それぞれの違い方について勘案すれば、オノマトペ述語文が最も意味的に近いのは動詞述語文ということになる。

3. 裸のオノマトペの叙述性を認めない先行研究の議論を本稿の立場から捉え直す

2 節の議論を踏まえて田守（1999）を見ると、本稿で言う「述定用法」の一部が pp.75-92「引用用法」「文外独立用法」「動詞省略」などとして説明されており、どうやらオノマトペは述語にならないという誤った前提に基づいているようである。

3.1. 田守（1999）pp.88-92「動詞省略」という把握について

先ずは「社長は売上げ増ににんまり。」「大雨でデパートはがらがら。」などの例文を挙げて「‐する」動詞や「‐だ」形のような「叙述要素が省略されているものと考えられる」と述べている。つまり裸のオノマトペで終止する形自体には叙述性を認めておらず、この見解は pp.75-92 において一貫している。しかしながら省略であ

る根拠は、そう見えるという点以外は特に挙げていない。もし単なる省略現象であれば、2 節で議論したような意味の制限は生れないはずである。pp.88-92 に挙がる裸のオノマトペで終止する形で、非文として挙げられていない 29 例のうち、「帰国してみると東京も、ミニ流行の一方で、パンツがちらほら。」については「他と比べて特に、偶発的に」という含意で、残りの 28 例は「一時的」な含意となっている。時間的限定性において「一時的／恒常的」と「偶発的／本質的」の対立は同じものの 2 面であり、様々な言語に見られることを高山（2011）等が指摘している。他方で p.89 に挙がる裸の名詞述語文の中には「この改訂版の教科書と参考書は九年生【ママ】を対象にしたもの。」のように「本質的」含意の例も見えている。なお「一時的」な含意のものの中には「これで英語ペラペラ」という問題のある例文が含まれているが、オノマトペとしてはあくまでも実際に英語を流暢に喋っている未来の一時的〈動き〉の描写と見る（アクセント HLHL/ HLLL）。但し形容動詞化した「英語ペラペラ（だ）。」（LHHH(H)、＝英語が流暢だ）だと〈特性〉の表現になり、このケースではオノマトペか形容動詞語幹かで意味が異なっている。同様の例としては、「胸がボインボイン。」（＝胸が弾むように揺れている）が〈動き〉の表現であるのに対して「胸がボインだ。」（＝胸が大きい）は〈特性〉の表現となり、更に形容動詞語幹から名詞に転じて「ボインちゃん」（＝胸が大きい女性）のようにも用いられている。このようにオノマトペ由来の他品詞と本来のオノマトペとを区別する必要があるが、助詞が付いたり動詞化する場合と違って、形容動詞化・名詞化する場合には単純に正書法で書いただけでは混乱を生じる場合がある。この点は 4 節で再論する。

次に「このような叙述要素の脱落は【略】オノマトペに限らない」と述べ、「バランスを崩して足から滑り込むように転倒。」「修学旅行は十一月八日から十一日までの三泊四日。」などの例文を挙げて「 - する」動詞や「 - だ」形が「省略されていると考えられる」と述べている。裸の名詞述語文に何か意味的な制限や特徴があるのかどうか分からないが、形式を削除しても意味は変わらないようなことが本当に起

こっているのかどうかは検討の余地がある。この点について本稿では立ち入らない。

次に「しかしながら、オノマトペの場合【略】一般の動詞の省略も起こる」と述べて「関東地方ぐらり」「波間にカモメぷかぷか」などの例文を挙げ、「これらの表現は「 - する」や「 - だ」が脱落したとは考えられず、他の動詞が省略されたと思われる」と述べ、「揺れる」「浮かぶ」「といった動詞がそれぞれ省略されたと推測される」とし、「動詞の省略が可能なのは、当該オノマトペが共起できる動詞が強く制限されており、【略】動詞が唯一無二に復元できるか、【略】2 つの意味的にほとんど同じ動詞が復元できるためである」としている。同様の見解は森岡（2001）p.296 にも見られ、「ア・イ・ウは、情態副詞が直ちに動詞に派生して、動詞的性質をもっていることを示している。エは象徴言が特定の動詞と共起する例で、動詞との共起は非常に固く、複数の動詞と共起するにしても同義か意味の関連する場合が多い。ア・イ・ウの情態副詞も「する」「なる」だけでなく、やはり特定の動詞と結びついていて、象徴言を見れば共起する語を容易に予測することができる」としているが、森岡は「だから動詞の省略が可能」とは言っていないし、動詞が共起しない場合については沈黙している。だいいち、この理屈はそのまま動詞と名詞の関係についても適用できてしまう。全ての動詞に意味的に対応する名詞を用意できるはずであり、オノマトペに意味的に対応する動詞が簡単に用意できるのは寧ろ当たり前である。動詞と名詞の場合は「歌を歌う」のようなケース以外は述語（補語を含む）として共起しにくいが、オノマトペと動詞では述語（副詞を含む）として共起しやすい為、あたかも「復元」のように見えているだけだと考える。

次に「なかには非常に多くの動詞と一緒に起こることができる「ゆっくり」や「こっそり」といったオノマトペもある。興味深いことに、このようなオノマトペは、文脈からどの動詞が省略されているかはっきりとわかる場合であっても、動詞の省略を許さない」と述べ、「??声を出して本を読んでいた生徒は、速すぎると先生に指摘されて、ゆっくり。」「??首尾よく留守宅に入った空き巣は、金目のものを集め、

その家からこっそり。」などの例文を挙げて、「動詞が文脈から唯一無二に示唆されるが、「ゆっくり」「こっそり」は【「読んだ」「抜け出た」を】省略できないようである。このことは、これらおよびこれらに類似する語のオノマトペ度がきわめて低いということと、動詞が省略できるかどうかということが単に文脈の余剰性に基づいていないということを示唆している」と述べている。しかしながらこれらの例では「ゆっくり・こっそり」を「遅く・密かに」に換えたところで許容度は同じになる。オノマトペ度がどうこうと言うよりは、「非常に多くの動詞と一緒に起こることができる」とあるように、これらが情態副詞と程度副詞の中間的な意味を有し、叙述性に乏しい為であろう。森岡（2001）pp.299-301 によれば「程度の副詞は情態の性質を有する属性の程度を示す」とされ、「やや、甚だ、頗る、もっと、とても、少し、最も、極めて」等が挙がる。特定の動詞との結び付きが強い／弱いということは、そのオノマトペの叙述性が強い／弱いということと同義であると考えられる。

3.2. 田守（1999）pp.75-88「引用用法」「文外独立用法」という把握について

「引用用法」は「「きゃーっ！」という叫び声があがった。」のような例を、「文外独立用法」は「チャポン。木の実が池に落ちたようだ。」のような例を指している。

引用用法については pp.82-83「1) 擬音オノマトペは擬態オノマトペよりも引用的に用いられやすい、2) 「と」を義務的に伴うオノマトペは「と」を必要としないものよりも引用的に用いられやすい、3) 異形はそのもとのオノマトペよりも引用的に用いられやすい、4) 2 モーラ反復形の擬態オノマトペは CVQCVri ないし CVNCVri という形態のオノマトペよりも引用として用いられやすい。これはおそらく、後者が前者よりも一般に類像性がなく、具体的な描写力に欠けるからであろう。以上検討したオノマトペの引用用法は、オノマトペのオノマトペ度および語彙性と密接に関係している。すなわち、オノマトペが引用的に用いられやすいほど、オノマトペ度が高く、語彙性は低い。この問題については、第 5 章で詳しく論じる。」と述べて

いる。なお第 5 章の pp.189-196「日本語のオノマトペ度」では引用用法と文外独立用法についても再論していて、ここで「オノマトペ度」が解説されている。

文外独立用法については pp.87-88「1) 臨時の擬音オノマトペが独立してもっとも用いられやすい、2) 「と」を必要とする擬音オノマトペは「と」を必要としないものよりも独立して用いられやすい、3) 異形はもとのオノマトペよりも独立して用いられやすい、4) 具体的な描写力を持つオノマトペはこのような描写力に欠けるものよりも独立して用いられやすい、5) CVQCVri ないし CVNCVri という音韻形態を持つオノマトペが独立してもっとも用いられにくい。このように、日本語オノマトペの独立用法に関しても、引用用法の場合とほぼ同様の状況が観察される。」と述べている。なお「異形」というのは、例えば(116)の「べろん」に対する(117)の「べっろーん」の類いで、p.77「(116)のオノマトペは慣習化（語彙化）された表現であるのに対して、(117)の異形は慣習化されていない、現実の動作をより忠実に描写しようと試みた、その場限りの臨時語に近い表現である」と説明している。

オノマトペ度については pp.189-190「このような語【＝擬声語・擬音語・擬態語】が示唆する範疇化が「語彙性（lexicality）および「オノマトペ度」（mimeticity）」に関するものであるということを提案するが、前者は、オノマトペと推測される語が言語の中でどれほど完全に語として機能しているかという程度を指し、後者は、ある語が話者によって直接的な模倣として認識される程度、すなわちその語がそれによって指示される音、様態、状態の非恣意的な現れとして認識される程度を指す。ここにおいても、ある特定の語が実際その指示現象を忠実に表示したものであるかどうかといった、ほとんど答えられないような問題は避けることにする。語彙性およびオノマトペ度が、上で定義した意味において、正反対の関係にあると仮定する。すなわち、語彙性の一番低い擬声語・擬音語・擬態語はもっとも具体的な描写力に富み、類像的で、直接的で、生き生きとした臨場感がある、等々、つまりもっともオノマトペ的である。一方、語彙性の高いものはその逆である。」と解説している。

また、p.196「ここで漫画の中でのオノマトペのラベルないしはレッテルとしての用法について言及しておこう。第 3 章で見たように、漫画に起こりやすい擬態オノマトペは次の 2 種類である。すなわち、「と」を義務的に伴うもの、および「と」の付加が任意であるが、「ごろごろ」のような、類像的に反復しているオノマトペである。慣習的で具体的な描写力に欠ける「ゆっくり」や「ぼんやり」といったオノマトペは通常、漫画の中でラベルとして起こることはない。」と述べている。

これらの見解については、事実認識としては大筋同意する。ただ、本稿の立場からは、具体的描写力とか類像性とかオノマトペ度とか、その逆の語彙性などという言葉は用いずに、叙述性が強いか／弱いかだけで説明することになる。記号論における形式と内容、有縁性と恣意性、類似性・類像、近接性・指標、恣意性・象徴のような用語は、文法における主語と述語と補語、存在判断と賓述判断、概念と属性、叙述と修飾のような用語と何らかの関係があるかもしれないが、簡単には説明が付かないので、すぐには混用すべきでないと考える。ところで、ここで問題にすべきは、「引用」だとか「文外独立」という用語に現れているように、裸のオノマトペで終止する形をまともな文として認めていない点である。本稿の立場からは、叙述性が強いものについては「引用文・文外独立文」の述語となっていると考える。

4. オノマトペが形容動詞化・名詞化するケースを本来のオノマトペから区別する

森岡（2001）p.295 が「情態副詞を列挙した論文の中に形容詞や形容動詞語幹（情態詞）の混じってくることがある。【略】原因は、その叙述性にあるといえよう。情態副詞は活用がないのに、その叙述性とは一体【略】」と述べた段階では「にこやか」の類いの形容動詞語幹を情態副詞から取り除くことが課題だった。

田守（1999）p.63「形容詞／形容動詞」に「結果副詞的に用いられる 2 モーラ反復形のオノマトペの形態分布（「ぴかぴかに」「ぴかぴかの」「ぴかぴかだ」）は、【略】一部の形容動詞の形態分布と平行している。【略】機能的にも形容動詞と類似してい

るので、形容動詞と見なせるかも知れない」とあるが、この点は田守に従う。この形容動詞語幹は裸だと「ピカピカ(だ) LHHH(H)。」となり恒常的〈特性〉を表す。

田守（1999）p.60「名詞用法」に「様態副詞あるいは動詞として機能するオノマトペのアクセントが高低低低であるのに対し、【略】名詞用法では、結果副詞と同様の低高高高というアクセント型を持つ」とあるとおり、装定用法は「ピカピカ(と) HLLL(L)光る。」などとなるが、これが述定用法だと「ピカピカ HLHL/HLLL。」となり一時的〈状態〉を表すという点に田守は触れていない。なお森岡の情態／程度副詞の区別に対して田守は情態を様態／結果に、程度を程度／頻度に細かく分類している。また名詞用法の例として田守は「ひらひら HLLL 舞い落ちた／ひらひら LHHH の付いたワンピース」の類いだけでなく「ワンワン HLLL 鳴いてばかりいる／このワンワン HLLL が一番可愛い」のようにアクセントが変わらない類いも挙げているが、どちらのケースでも述定用法だと「ヒラヒラ HLHL/HLLL。／ワンワン HLHL。」となり一時的〈動き〉を表す。アクセントが音節の畳語構造に従う場合には記号の有縁性が高まっていると考えられるが、擬声語の場合に*HLLL が不自然なのは有縁性の高さゆえと考える。擬音語でも擬声語と同様に「トントン HLHL/*HLLL。（叩く音）」となる。なお音節構造によっては下がり目の無い「トントン HHHH。」というアクセントで現れる場合もあるが、文法的には「トントン HLHL。」と等価と見る。

3 節で「動詞省略」の問題を議論した際には「ペラペラ LHHH。〈特性〉」と「ペラペラ HLHL/HLLL。〈動き〉」がどちらも正書法では「ペラペラ。」と書かれるため紛らわしいということが問題になった。本稿では前者を「裸の形容動詞語幹の述定用法」、後者を「裸のオノマトペの述定用法」と呼んで区別する。また「あの人はカタコト？ペラペラ LHHH？」に対して「ペラペラ LHHH。」と答えるようなケースでは「裸の名詞の述定用法」が（臨時的に）認められる。「オノマトペ」という用語によってどの範囲を指すかという問題が生じるが、「形容動詞的／副詞的／名詞的」を付けて区別するのも一案だし、「副詞的オノマトペ」だけを「オノマトペ」として他

は「形容動詞／名詞」としてしまうのも方法である。前者では「オノマトペ」を形態の観点から、後者では品詞の観点から分類している。本稿はオノマトペ述語文の存在を示すことを目的とするため品詞の観点からの分類を主に採用し、原則として「オノマトペ」は副詞的オノマトペを意味している。但し3.1節で田守（1999）pp.88-92に見える29例の裸のオノマトペの時間的限定性を評価した際には、一時的〈状態〉を表す方の形容動詞的オノマトペ（表1参照）をも「オノマトペ」と呼んでいる。

なお形態の観点からの分類では、他にも「動詞的／形容詞的」オノマトペが存在する。動詞的オノマトペは「する」を直接付けた「イライラする」のような例で、形容詞的オノマトペは田守（1999）p.64「けばけばしい／むず痒い／ぼろい」のような例である。これらは述定用法において副詞的オノマトペと混同される危険性が無いため本稿の議論と直接の関係は無い。また伝統的にもこれらは「動詞／形容詞」として扱われてきたはずであり、形態の観点からの分類と品詞の観点からの分類とが伝統的には折衷されてきたことが窺える。本来のオノマトペとして副詞的オノマトペを定め、その他の品詞に属するものは（生産的か否かにかかわらず）派生したものと見なすべきであり、形容動詞的／名詞的オノマトペも例外にはならない。

5. 感動詞文の叙述性と有縁性についてオノマトペ述語文のそれと対照する

森岡（2001）pp.311-318は、「感動詞は説話者自己の心意の状態を主観的に表示する」「言葉となるためには、表出音を詞化する必要があり、舌鼓や嘲笑の表出音を「ちえ」「へん」と言語音で模写（真似）しなければ感動詞にはならない」【※苛立ちを表す吸着音[!]は生理的現象ではないので[ʧeː]と同じく感動詞と考える】「象徴言は【略】情態副詞になったり、語の構成要素になったりするが、感動詞はそのままの形で用いて、【略】語の構成要素にならず、一つの文のようにそれだけで表現が完結する」「主語にも客語にも修飾語にもならない。述語にならず、また修飾接続せられる事もない」「[感動] ああ、お、やあ、まあ」「[応答] はい、あい、おう、うんうん」

「[呼掛け] もし、おい、やあ、さあ」「副詞と感動詞は形態の上から区別しにくいものがある。【略】「まあ」や「まあまあ」も、感動詞 まあ、ひどい。まあまあ、おめずらしい、よくいらっしゃいました。 副詞 まあ、座りなさい。まあまあ、安心です。まあまあの出来です。のように使われる。話者自身の気持の表出は感動詞になり、話者が文の内容に意見を挿入すると、副詞になる」と述べている。主語と述語の分節が見られない（「お星さまキラキラ。」のように主語を取れない）事からは「文」に相当し、「述語文」にはならないと考えられる。しかしながら意味を考えれば、話者自身の気持ちという一時的〈状態〉を具体的に述べているのだから叙述性は認められる。従って感動詞文は述語文ではないが叙述性を持ち、述語の概念とは別に叙述性の概念を立てる必要があると分かる。また一部の感動詞はオノマトペに似て類像性が高く、どの感動詞も心をこめて発音すれば指標性が高くなるので、一般に感動詞は有縁性が高い。総合的に見て、感動詞はオノマトペに似ている。

6. おわりに

そもそも叙述性とは何か、叙述性と有縁性には何か関係があるのか、叙述性は文法の概念にすぎないのか広く記号論の概念たりうるのか、主語と述語が分節しているのは言語記号だけなのか、各品詞の叙述性の有無や程度をどのような基準で評価するのか、各品詞の内部でも語の意味によって叙述性の程度に違いはあるのか、叙述性を持つとされる語は文の述語になっていない時にも叙述性があるのか、逆に叙述性が無いとされる語も構文や文脈によっては叙述性を持ちうるのか、等々の基本的な問題が残されているものの、本稿ではそこまで立ち入らず、既存の「述語になりうる品詞群」に対してオノマトペを新たに付け加えるという姿勢で記した。また感動詞は述語にはならないが叙述性を持つと考えた。一般の情態副詞や程度副詞もいくらかの叙述性を持つ可能性があると指摘した。少なくとも、「動詞・形容(動)詞・名詞だから述語になり、その他の品詞だから述語にならない」という硬直化した議

論の問題点については本稿で指摘できたのではないかと思う。

参　照　文　献

影山太郎 (2011)「属性と事象の区別とその言語学的意義」『日本言語学会第 142 回大会予稿集』: 4-9. 京都：日本言語学会.

亀井孝ほか（編）(1996)『術語編』, 言語学大辞典第 6 巻. 東京：三省堂.

森岡健二 (2001)『要説日本文法体系論』東京：明治書院.

高山林太郎 (2011)「岡山県妹尾方言におけるジャとナの含意」『東京大学言語学論集第 31 号』東京：東京大学言語学研究室.

田守育啓・Lawrence Schourup (1999)『オノマトペ —形態と意味—』, 日英語対照研究シリーズ(6). 東京：くろしお出版.

八亀裕美 (2001)「現代日本語の形容詞述語文」『阪大日本語研究 別冊 1 号』大阪：大阪大学日本語学研究室.

八亀裕美 (2003)「形容詞の評価的な意味と形容詞分類」『阪大日本語研究 15 号』: 13-40. 大阪：大阪大学日本語学研究室.

八亀裕美 (2007)「形容詞研究の現在」工藤真由美編（2007）『日本語形容詞の文法—標準語研究を越えて—』: 53-77. 東京：ひつじ書房.

八亀裕美 (2011)「日本語諸方言の形容詞述語文」『日本言語学会第 142 回大会予稿集』: 10-13. 京都：日本言語学会.

【要旨】本稿では情態副詞の中でもオノマトペに着目し、裸のオノマトペで終止する形がオノマトペ述語文であることを示す為に、時間的限定性における恒常的含意が許容されないという意味的制限が存在することを指摘し、他の述語文との意味の違いについて論じた。また意味的制限の原因を記号の有縁性に求めた。また一般に、叙述性の強いものが述語になりやすいと主張した。